



柳泰典「にーコー花篠地」(2008) 撮影：阿野太一



【きたがわ・しらむ】アートディレクター。1946年徳島県高田町(現上板町)生まれ。東京藝術大学卒業。「子どものための絵画展」、日本におけるガウディ・ゴームの開催となった「アンニオ・ガウディ展」等多数の展覧会・イベントをプロデュース。瀬戸内十日町音を中心とした過疎の地域活性化プロジェクト等、多くの街づくりを実践。「大島の芸術祭」経営委員会アートリエンナーレ2000(01)は01後の「ふるさとイビセント大賞グランプリ」を受賞した。長年の文化活動により、「03年フランス共和国政府より芸術文化勲章シニギニア受勲。平成18年度芸術選奨文部科学省大臣賞(芸術振興部門)。アートフロントギャラリー主宰http://www.artfront.co.jp

瀬戸内便り—「直島から瀬戸内へ」

が、子供たちが元気になる場所を探していく、当時の直島町長三宅親連氏と意気投合して選んだことが出発になる。これが1985年。その後代が替わり、設計を安藤忠雄さんに依頼して、現会長の福武總一郎氏がここに現代美術の展示をするホテル、ベネッセハウスを建設したのがアート活動の起点となる。以来、空屋を作家の独立した展示空間とする「家プロジェクト」、地域全体を活かす屋内外を使った2度にわたる「スタンダード展」、モネの睡蓮、ジェームズ・タレル、ウォルター・デ・マリアのための空間を用意した、これも安藤忠雄設計になる「地中美術館」開館へと続き、昨年は直島に28万人、地中美術館に12万人、3箇が外国人という世界的にも有数の現代美術の聖地と言われる場所になった。町の人々も元気になり、町は「アートとエコ」を施策の中心に据えている。ベネッセアートサイト直島で検証されたアートのもつ働き、特にお年寄りたちに具体的な活動(作品づくりへの参加、街の案内、作品の管理)が用意されたことで、爺さん婆さんはイキイキとし、笑顔をもって来場者に接するようになってしまったことは、閉塞したこの日本社会のなか、特筆すべき希望のありかを示してくれたように思う。全体を主導した福武さんは、直島での可能性を瀬戸内に広げていきたいと考え。それが瀬戸内国際芸術祭への彈機となつた。

瀬戸内は美しい海である。越湯の風景そのままに、綾瀬かに、揺れる島影が空気還近法そのもののように幾重にも重なりあう。外国を知らない私にはわからないけれど、明治以来、この地を訪れた人々は、その美しさを絶賛して止まない。「世界でもっとも美しい内海ではないか」と。ところがこの百年、私たちは経済的効率を追い求め、内陸の開発を最優先にし、交流の海はそのための單なる通路になり、豊かな海底の魚床の土砂はすいあげられ、それぞれが固有の歴史とコミュニティをもつ島々は、その隔離性だけを利用されて、有機ガスを排煙する精錬所に使われたり、産業廃棄物の大量不法投棄場所になったり、当時は伝染病と考えられてハンセン病の施設として閉じ込められてきた。洩はかなこの百年の歴史と、効率一辺倒の価値觀によって、島のボテンシャルが著しく没落し、高齢化と人口減少はとどまる事を知らなくなつた。当然、島の美しさ、瀬戸内の海の豊饒さはなくなつていく。

それをもう一度アートによって豊かにしようとするのが、瀬戸内国際芸術祭であり福武さんの願望だった。

第一弾として大正年間10年だけ稼動した犬島の精錬所が、建築とアートによる「精錬所」として生まれ変わったのだ。